

卷 頭 言

「知の多様性一次世代に伝えるー」



榎戸 武揚*
Takeaki ENOTO*

中谷宇吉郎博士の「雪は天からの手紙である」そのままに構内を真白にして初雪がうれしい知らせを届けてくれた。鈴木章北大名誉教授、根岸英一米パデュール大（北大特別招聘教授）の両先生とリチャード・ヘック米デラウェア北大名誉教授がノーベル化学賞を授賞されるという快挙に続き、お二人に文化勲章が贈られるという楽しい手紙が舞い降りてきた。両先生に心からお慶び申し上げます。同じ北大に学生時代から通算して45年間を過ごした一人として誇らしい知らせでした。

北大では小澤保知教授を中心として昭和32年頃から加速器を設置する準備が始まり、大電力極超短波回路の研究から始めて、4MeV線形電子加速器、45 MeV加速器が設置され、瞬間強力パルス状放射線発生装置研究施設が認められた。その施設の助教授に採用されてから加速器と私の関わりが始まり、リニアク研究会には最初から参加させていただいた。

ジェームズ・スミソンが「知識の向上と普及」のために寄贈した資金によって設立されたスミソニアン博物館のRenwick Galleryで「The Art of Gaman」が展示されている。強制収容所の日本人が尊厳を持って耐え抜いて作り上げた幾多の作品を米国人が過去の歴史の反省にたって集めた作品である。博物館への入場料は無料である。

2009年～数年、無駄を廃止し国家財政を立て直すとの標榜のもと価値の多様性を尊重する評価基準を持たないまま経済至上主義で進められた事業仕分けが国民からは一定の評価を受けたこともあり、「知の継承と創造」を責務とし、文化の多様性が尊重されるべき教育・科学の基礎研究にまでその矛先が向けられた。結果、国立美術館や科学館に対しても、自己努力で収入を増やせ、入場料で維持できますか？そして「2番ではいけないのですか」の発言など傲慢にさえ映る仕分けにとどめを刺された経費削減の嵐。「角を矯て牛を殺す」ごとき施策は科学・技術分野の荒廃をまねき、特に基礎研究分野では進学希望学生数が減少し、夢を失った多くの有意な学生・研究者の海外流失をもたらし、企業は国内からの人材採用を大きく削減し海外に頼らざるを得なくなった。2010年に感動に胸躍らせた「はやぶさ」の地球への帰還。幾多の困難を乗り越え帰還できたのは、過去の火星探査機「のぞみ」での失敗経験とイオンエンジンに追加されていた一見無駄と思われる半導体の存在、そして関係者の懸命の努力の賜であった。なぜか時は202x年で、海外学振研究員になっている自分が、「はやぶさ」は世界で初めて「いとかわ」小惑星の粒子のお土産まで持ち帰ってくれたが、良い意味で許されていた無駄・余裕に対してもすすめられた事業仕分けが10年経たないうちに「知の多様性」、「世界で初めてへの意欲」を絶滅させてしまう様子を体験している悪い初夢を見ていた。

未知への興味と畏敬から始まり、素朴な疑問、不思議がる心、それ等の積み重なりが大河となって今日の優れた叡智となり、未来へと引き継がれる。科学・技術の叡智の継承・創造は今を生きる我々科学者に課せられた責務である。流れを絶たれた河は姿を変え、その復活は容易ではない。

現在、大学に置かれている加速器の多くは設置から時間が経ち維持費も無くなり、技官の削減等もあり、大きな故障が起これば廃止の岐路に立たされている。成果が認められた研究テーマは大型装置で世界に伍した研究が進められるが、萌芽的な課題、独創的な新しい研究の推進には、身近にあり、運転時間に余裕がある装置でないとなかなか成果をあげられない状況にある。多くの加速器の廃止は新しい研究の芽を摘み、若手研究者の育成を困難にする。加速器学会、中枢機関が連携して各大学の加速器装置の運転に協力する体制を構築し、維持、改良、若手研究者の育成を考える時期に来ているように思う。さらには各大学の専攻に所属しながら複数の大学で開講される講義を受講して単位が取得でき、それぞれの大学の学位に加えて、加速器科学の学位をも併せて取得できる大学間横型専攻の設置。これができれば大学院生の志望者の増大も期待でき、学生はいくつかの大学の様々な装置を経験し、修理、運転等を身近に感じられる。加速器研究に関連する研究者が連携し、尊厳を持って耐え抜くことで、我々に課せられた「加速器の多様な知の継承と創造」を成し遂げられる。

* 北海道大学名誉教授